第一章　浮舟の物語　左近少将との縁談とその破綻

［第一段　浮舟の母、娘の良縁を願う］

*筑波山を分け見まほしき御心はありながら（薫殿は姫を見て気に入った以上は、古歌に「筑波山端山繁山茂けれど思ひ入るには障らざりけり」とあるように、筑波山麓の常陸で育った姫をもっと良く知りたいというお気持はありながら）、端山の繁りまであながちに思ひ入らむも（端下身分の女にまで無闇に興味を持つのも）、いと*人聞き軽々しう（大将の身分を自覚すれば、とても傍目に軽々しく）、かたはらいたかるべきほどなれば（見っともないことなので）、思し憚りて（自制なさって）、御消息をだにえ伝へさせたまはず（御手紙ででさえ姫にお気持を知らせ伝えなさいません）。　*「筑波山を分け見まほしき」の言い回しは、注に＜『異本紫明抄』は「筑波山端山繁山茂けれど思ひ入るには障らざりけり」（新古今集恋一、一〇一三、源重之）を指摘。＞とある。が、薫殿は「御心はありながら」「思し憚りて」いるのだから、歌意に反して＜思ひ入るには障る＞のである。　*「人聞き軽々しう」は注に＜薫は右大将兼権大納言。それが受領常陸介の娘に恋するのは憚られる。『完訳』は「東国の受領の娘が相手では、と憚られる気持。大君の形代としてのみ関心」と注す。＞とある。確かにそういう文意らしい、とは私も思う。が、今さら何を言っているのか、とも思う。宿木巻九章の薫殿と姫君との接遇を私は大筋の合意があった上でのこととして読んでいたが、それはずいぶん先走った読み方だったのだろうか。しかし、その接遇があった四月下旬に弁が薫殿にした説明では、「しか、仰せ言はべりし後は、さるべきついではべらば、と待ちはべりしに、去年は過ぎて、この二月になむ、初瀬詣でのたよりに対面してはべりし。」（宿木巻九章四段）と語られていた。「さるべきついではべらば」は下に＜語りはべらむ＞あたりが省かれた＜その内に折り入って相談したい＞という言い方で、「さるべきついで」に薫殿の婚意を初めて知らせるのではなく、その薫殿の意向は弁が先方に事前に知らせてあったが、「去年は過ぎて（去年は話を詰める機会が無くて）」「この二月になむ（今年の二月になって）」「対面してはべりし（話し合った）」と読むのが普通だろう。「しか仰せ言はべりし」は、去年の九月下旬に薫殿が宇治へ出向いた際に、弁に妹君から聞かされた異母妹のことを尋ねて、その女が「常陸になりて下りはべりにける」（宿木巻七章四段）受領家の娘で、「かの君の年は二十ばかりになりたまひぬらむかし」（同）などと「詳しく聞きあきらめたまひて」（同）、「見ばやと思ふ心出で来ぬ」（同）ので「かくなむ言ひしと伝へたまへ、などばかりのたまひおく」（同）と語られていたのであり、その殿の意向を弁が独断で自分の胸に保留する権限も意味も無いので、弁は直ぐ先方に知らせたことは間違い無い。確かに薫殿はその時に「わざとはなくとも、このわたりにおとなふ折あらむついでに」という言い方はしていたが、この主従関係に於いて「わざとはなくとも」が＜わざと左様整へよ＞以外の意味を持つことは無い。とはいえ、当時の薫殿は中納言であり、それでも天下の要人だが、先方の受領家に於いても、だからといって手放しで飛びつけない事情は有り得るし、調整に時間を要して「この二月になむ」ようやく受領家母娘が宇治へ出向く運びとなったらしい。が、その二月当時は薫殿の内親王との結婚があって、引き合わせには至らなかった。そこで、弁は四月下旬にあらためて両者の引き合わせを企画したが、母君は積極姿勢を避けたのか同席せず、娘一人を宇治へ出向かせた。しかし、薫殿の大将昇進と内親王との結婚という貴人ぶりを目の当たりにした上で、再度顔見世に臨むからには、受領家身分の娘であればせいぜい上臈女房の召人待遇となるのは承知の筈で、それでも中央政界に縁付いて一族の栄達に資するというのが中流以下の貴族の女の役割認識なのだろう、と私は勝手に考えていたが、「人聞き軽々しう」と薫殿が考えるとしたら、薫殿はこの受領家女を王家待遇しようと思っていたのかと驚く。匂宮が、実勢の無い没落家で親にも死に別れたとはいえ、血筋と形式家格は王家である宇治妹君を御部屋様に遇することでさえ、世情規範から外れていたようなのに、受領家女を御部屋様に遇するなど論外ではないのか。確かに光君は明石御方を御部屋様に近い形で待遇したが、それもあくまで明石姫の実母ならではの特別待遇であって、みだりに下層階級の者を厚遇する

ことは身分秩序の維持に反するので厳に慎まなければならない、というのが当時の社会規範だったかと思う。しかし、時代の隆盛は必ず生産現場から実現されるので、中央管理者からは遠い現業管理者が財を蓄積した結果として体現され、その勢力を中央管理者は身内に引き入れる事で権勢を維持するので、場合によっては上位者が下位者に頼み込んで血縁関係を結ぼうとする。が、それも手順を踏んで、養子縁組などで家格を整える下準備をしてから、身分秩序に適うように婚儀は運ばれるものであり、個人の思い入れだけで勝手に様式を変える事は許されない。という当時の常識、とはいえ社会構造およびその秩序維持の基本認識は今も変わらないもので、当時とは身分制度の具体様式が変わるだけだとも思うが、に沿って読む限りは、この文は時間を遡って、四月の接遇以前の事情を語っているのかとも思ったが、見ず知らずの人からの手紙は、公文書ならともかく私信となると、そも現実的では無いので、やはり是は接遇後の話と見る他はなさそうだ。であれば、覗き見して、すっかり気に入ったと語られた宿木巻九章の接遇話から、如何してこんな展開になるのか。つくづく薫という人物は、煮え切らないくせに執念深い、始末の悪いヤツだと思えてならない。それに大体、結婚話が進みそうな気配で宿木巻は終わっていたが、実は、実際に殿と姫はその夜にどのように会ったのか会わなかったのか、どんな風に別れたのか、という肝心の話は何も語られておらず、「筑波山を分け見まほしき御心はありながら」と語り出す舞台設定の御膳立てが全く出来ていない。脱稿はあるのだろう。非常に不満だ。が、このまま本文を読み進む以外に、一読者に出来ることなど何一つと無いので、自分なりに読み易くなる様に渋々補語を工夫する。

かの尼君のもとよりぞ(弁尼の方からは)、母北の方にのたまひしさまなど(母君の前常陸介夫人に薫殿が姫を所望なさっている熱心さなどを)、たびたびほのめかしおこせけれど(たびたび知らせて良い返事を促していたが)、まめやかに御心とまるべきこととも思はねば(母君は薫殿が本気で姫との結婚を御考えとは思わなかったので)、ただ、*さまでも尋ね知りたまふらむこと(ただ、大将殿はずいぶんと熱心に故八宮の縁故をお調べなさるものだ)、とばかりをかしう思ひて(とこの縁談を大将の好奇心の強さとして感心して)、人の御ほどのただ今世にありがたげなるをも(姫に関心を寄せなさる薫大将が、内親王を娶るという世にも稀な権勢家ぶりであるにつけても)、数ならましかば(当家が中央政界に仲間入りするほどの高家であったなら)、などぞ*よろづに思ひける(などと姫が大将に相応しい家柄ではないので、この結婚申し込みを受けたものかどうかいろいろと思い悩むのでした)。　*「さまでも尋ね知りたまふらむこと」は<そうまで熱心に探し出そうとなさるとは>という驚きの言い方だろうが、この「さまで」の対象被体は何か。それは「のたまひしさま」の中にありそうだ。で、薫殿が弁にどういう言い方で常陸女への婚意を示したかと言うと、宿木巻七章四段に「昔の御けはひに(故姉君の御姿に)、かけても触れたらむ人は(少しでも似ている人なら)、知らぬ国までも尋ね知らまほしき心あるを(知らない国までも探して行きたい私なのだから)、数まへたまはざりけれど(故宮が我が子とお認めなさらなかったとは言え)、近き人にこそはあなれ(血縁の近い人なのだから)、わざとはなくとも(わざわざそうすることではないにしても)、このわたりにおとなふ折あらむついでに(あなたに近況連絡があった時にでも)、かくなむ言ひし(私が会いたがっている)、と伝へたまへ(と伝えてください)」とあって、源氏の薫君が故姉君の身代わりを求めているので、血縁の近い姫を欲しがっている、と弁が母君に伝言していたと分かる。で、姫を<故姉君の身代わり>と思うのは薫殿の勝手なのであって、母娘の立場で主張できるのは<血縁の近さ>だから、母君の印象として薫殿の婚意を<血縁への拘り>と取るのは誇らしい解釈だ。だから、「とばかりをかしう思ひて」の文意を左様に言い換える。　*「よろづに思ひける」は、姫を宇治へ送り出しておいて何を今さら、と思えなくもないが、何故母君はその時に同席を避けて、姫独りを宇治へ行かせたのかは、当時から少し疑問ではあった。何か迷いがあって、姫自身の運に掛けたのではないか、と思っていたが、それは当たらずとも遠からずで、手離しで乗り気とまではなれない事情が母娘の方にもあったらしい。その辺の事情が以下に語られるのかも知れない。

*守の子どもは(前常陸介の子供は)、母亡くなりにけるなど、あまた(亡くなった前妻の子なども多数居たし)、この腹にも、姫君とつけてかしづくあり(この母君との間にも姫君と名づけて大事に育てている娘が居て)、まだ幼きなど、すぎすぎに*五、六人ありければ(その下にも、まだ幼い者が年子で五、六人居たので)、さまざまに*この扱ひをしつつ(夫はそれぞれを我が子として可愛がりつつも)、異人と思ひ隔てたる心のありければ(連れ子姫を他人として分け隔てする気持があったので)、常にいとつらきものに守をも恨みつつ(夫人の母君はいつもとても冷たいと夫を恨んで)、「いかでひきすぐれて(何とかこの姫を他の子よりも高貴な人に縁付けて)、おもだたしきほどにしなしても見えにしがな(面目が立つようにさせてみたい)」と、明け暮れ、この母君は思ひ扱ひける(と日々の暮らしの中で、この母君は連れ子姫を気に掛けていました)。　*「守(かみ)」は注に＜常陸介。長官は太守、親王が任命され赴任しない。介が赴任して実質上の長官なので「守」と呼称される。＞とある。親王任国は、常陸(ひたち)・上総(かづさ)・上野(かうづけ)の三国、とのこと。　*「ごろくにん」と曖昧に言うのは、他家の事情で不案内だということではなく、断定に伴う子細説明を省く言い方なのだろう。尤も、別腹の子が居る可能性は有るのかも知れないが、それでも子供の数など直ぐ分かる。　*「この扱ひをしつつ」は注に＜主語は常陸介。＞とある。「この」は常陸介にとっての＜自分の＝我が子としての＞という言い方らしい。「つつ」は＜一方では〇でありながら、他方では違う＞という語用で、結果として下文に逆接するようだ。

さま容貌の、なのめに(連れ子姫が容姿や顔立ちが普通で)、とりまぜてもありぬべくは(他の子と変わらないほどであったなら)、いとかうしも何かは苦しきまでももてなやまじ(何もこうまで如何して苦しいほどに悩むことも無く)、同じごと思はせてもありぬべき世を(他の娘と同じ程度の結婚相手を考えてもらえば十分な身の上だが)、ものにも混じらず(段違いに)、あはれにかたじけなく生ひ出でたまへば(美しく高貴な血を引いて成長なさったので)、あたらしく心苦しき者に思へり(並みの相手では惜しまれて仕方が無いのです)。

娘多かりと聞きて(前常陸介の家には娘が多く居ると聞きつけて)、なま君達めく人びとも(そこそこの貴公子たちも)、*おとなひ言ふ(結婚を申し込む者が)、いとあまたありけり(とても多く居ました)。初めの腹の二、三人は(後妻の母君は、先妻腹の娘の二、三人に)、皆さまざまに配りて(皆それぞれに相応しい相手を配慮して縁付けて)、*大人びさせたり(独立の家を構えさせました)。今は*わが姫君を(そして今度はこの連れ子姫を)、「思ふやうにて見たてまつらばや(理想的に縁付けたい)」と、明け暮れ護りて、なでかしづくこと限りなし(と、ずっと寄り添って、大事に可愛がることこの上ありません)。　*「おとなふ」は＜音を立てる→音信を伝える→手紙を出す＞ということらしい。「おとなひ言ふ」は＜手紙で言い寄る→結婚を打診する＞だろうか。　*「おとなびさせたり」は注に＜主語は北の方。＞とある。此処の主語は常陸介でも良さそうに見えるが、続く「今はわが姫君を」の言い方からすれば、やはり＜後妻の母君＞と見るべきなのだろう。　*「わが姫君」は注に＜連れ子の浮舟。常陸守との間にできた姫君と区別してこういう。＞とある。

[第二段　継父常陸介と求婚者左近少将]

守も卑しき人にはあらざりけり(夫の前常陸介も身分の低い人ではなかったのです)。上達部の筋にて(中央高官の家の出で)、仲らひも*ものきたなき人ならず(親戚も評判の悪い者は居らず)、*徳いかめしうなどあれば(財力も威勢があったので)、ほどほどにつけては思ひ上がりて(分相応の自覚を持って)、家の内もきらきらしく(家の中も豪華な調度で飾り)、ものきよげに住みなし

(整理整頓された暮らしぶりをしていて)、事好みしたるほどよりは(風流事を好むよりは)、あやしう荒らかに田舎びたる心ぞつきたりける(どうも荒々しく田舎者めいた気質が染み付いて居たのです)。　*「ものきたなし」は＜何かと見苦しい＞みたいな語感で、是を具体形容では無く印象形容で語用するなら＜評判が悪い＞あたりだろうか。　*「徳」は一般に品の良さや尊敬される人格を言う＜品性・善行＞などを指すが、此処では＜財力・蓄財＞のことらしい。

*若うより(若い時から)、さる東方の(さるあづまかたの、そうした常陸などという東国の)、遥かなる世界に埋もれて年経ればにや(都から離れた世界に埋もれて何年も過ごしたからか)、声などほとほとうちゆがみぬべく(言葉もほとんど訛って)、ものうち言ふ、すこしたみたるやうにて(何か言うにも少し田舎臭く)、豪家のあたり恐ろしくわづらはしきものに憚り懼ぢ(権勢家を恐れて障りの無い様に恐縮して)、すべていと*またく隙間なき心もあり(とにかく非常に臆病で抜け目ない気質もあります)。　*「わかうより」「上達部の筋」ながら地方へ任官するということは、長男ではないという事を意味するのだろう。何故その事情を明示しないのか、それが普通の女房語りなのか、何か意図が有るのか、少し気になる。　*「またし」は「全し」と表記され＜完全無欠だ＞または＜安全路線だ＞という言い方で、此処では後者らしい。

をかしきさまに琴笛の道は遠う(風雅な音曲の道には疎く)、弓をなむいとよく引ける(武術に長けています)。なほなほしきあたりともいはず(こうした並の貴族にも関わらず)、勢ひに引かされて(受領である常陸介家の財力の豪勢さに引かれて)、よき若人ども(見苦しくない若女房たちが)、装束ありさまはえならず調へつつ(えもいわれぬ美しい装束で着飾って)、*腰折れたる歌合せ(真似事程度の歌会や)、物語(昔話や故事を姫に話し聞かせたり)、*庚申をし(庚申の徹夜遊びをしたりして)、まばゆく見苦しく(派手に節操も無く)、遊びがちに好めるを(風流ぶっているのを)、この懸想の君達(この姫に気のある貴公子たちは)、　*「腰折れ」は「腰折れ歌」のことらしく、「腰折れ歌」は大辞泉に＜和歌の第3句と第4句との接続がうまくない歌。へたな歌。また、自作の歌をへりくだっていう語。＞とある。　*「庚申(かうしん)」は「庚申待ち」のことらしく、「庚申待ち」は大辞泉に＜庚申(かのえさる)の日、仏家では青面金剛(しょうめんこんごう)または帝釈天(たいしゃくてん)、神道では猿田彦神を祭り、徹夜する行事。この夜眠ると、そのすきに三尸(さんし)が体内から抜け出て、天帝にその人の悪事を告げるといい、また、その虫が人の命を短くするともいわれる。村人や縁者が集まり、江戸時代以来しだいに社交的なものとなった。庚申会(こうしんえ)。《季 新年》＞とある。

「らうらうじくこそあるべけれ(教養がありそうだ)。容貌なむいみじかなる(相当な美人らしい)」

など、をかしき方に言ひなして(などと良い様に受け取って)、心を尽くし合へる中に(競って言い寄る中に)、左近少将とて(さこんのせうしゃうとて、左近衛府の少将で)、年二十二、三ばかりのほどにて(年齢が二十二、三ほどの人が)、心ばせしめやかに(気立てが穏やかで)、才ありといふ方は、人に許されたれど(学問に於いては一目置かれていたが)、きらきらしう今めいてなどはえあらぬにや(派手な遊びには向かない性格なのか)、通ひし所なども絶えて(通っていた女の所へも行かなくなり)、いとねむごろに言ひわたりけり(とても熱心にこの姫に言い寄って来ていました)。

この母君、あまたかかること言ふ人びとの中に(この母君は大勢このように姫に言い寄る人たちの中で)、

「この君は(この少将君は)、人柄もめやすかなり(家柄も悪くない)。心定まりても(浮気はしなさそうだし)もの思ひ知りぬべかなるを(利口そうな上に)、人もあてなりや(品も良い)。これよりまさりて、ことことしき際の人はた(この人以上の高い身分の人となると)、かかるあたりを、さいへど、尋ね寄らじ(地方官あたりの娘を、さすがに嫁には求めないだろう)」

と思ひて(と思って)、*この御方に取りつぎて(当の姫君に手紙を取り次いで)、さるべき折々は(季節の行事があった時などには)、をかしきさまに返り事などせさせたてまつる(和歌の素養などを仄めかすような御返事を書かせ申し上げます)。　*「このおおんかた」は注に＜浮舟をさす。＞とある。確かに、この「御」は分かり難い。が、それにしても、「うきふね」とは＜連れ子姫＞のことらしいが、本文に未だ語れていない名称で解説する姿勢は、専門用語が通用する学会とは違うこのウエブ上の一般公開の場に於いては、閉ざされた特定の相手を意識しているようで非常に疑問だ。

心一つに思ひまうく(母君は独りで姫の世話を焼くのです)。

「守こそおろかに思ひなすとも(夫が姫を軽く見做そうとも)、我は命を譲りてかしづきて(自分は命懸けで姫を守り世話して)、さま容貌のめでたきを見つきなば(その容姿端麗さを目にすれば)、さりとも(いくらなんでも)、おろかになどは(劣った者などとは)、よも思ふ人あらじ(まず思う人はいないだろう)」

と思ひ立ち(と考えを決めて)、八月ばかりと契りて(八月を婚儀と少将方と約束して)、調度をまうけ(調度品を造らせ)、はかなき遊びものをせさせても(ちょっとした飾り細工をさせるにしても)、さまことにやうをかしう(それは見事に)、蒔絵、螺鈿のこまやかなる心ばへまさりて見ゆるものをば(蒔絵や螺鈿の細かな仕事が優れているものは)、この御方にと取り隠して(この姫の為にと隠し置いて)、劣りのを(出来の悪い物を)、

「これなむよき(是なんか良いですねえ)」

とて見すれば(と言って夫に見せれば)、守はよくしも見知らず(夫は出来の良し悪しが良く分からず)、そこはかとない物どもの(特に如何という事もない日用品の)、人の調度といふ限りは(周りが必要だと言う道具類は全て)、ただとり集めて並べ据ゑつつ(とにかく取寄せ集めて部屋に並べ置いては)、*目をはつかにさし出づるばかりにて(自分の姫君が目をわずかに覗かせて居場所が無いくらい物で埋もれさせては)、琴、琵琶の師とて、*内教坊のわたりより迎へ取りつつ習はす(琴や琵琶の師として御所で女楽を教える楽士たちを迎え入れて習わせます)。　*「目をはつかにさし出づるばかりにて」は注に＜『完訳』は「娘たちが道具の中に埋れて、目をわずかに出す趣。戯画的表現」と注す。＞とある。　*「内教坊(ないけうばう)」は大辞泉に＜奈良・平安時代、宮中で舞姫をおいて女楽・踏歌などを教え練習させた所。坊家(ぼうけ)。＞とある。

手一つ弾き取れば(夫は愛娘が一曲弾けるようになると)、師を立ち居拝みてよろこび(師を立っては崇め座しては拝んで喜んで)、禄を取らすること(褒美の衣類を)、埋むばかりにてもて騒

ぐ(埋もれるほどに師に与えて騒ぎます)。*はやりかなる曲物など教へて(賑やかな分かり易い曲を教えて)、師と(楽士が姫君と)、をかしき夕暮などに(陽気の良い夕暮れに)、弾き合はせて遊ぶ時は(合奏する時には)、涙もつつまず(夫の前常陸介は涙も隠さず)、をこがましきまで、さすがにものめでしたり(変に見えるほど、感激して褒めちぎります)。　*「はやりか」は＜調子が早い。はずんだ。＞と古語辞典にある。良く分からないが、明るい感じの賑やかな曲みたいなことだろうか。また、「曲物」は「ごくもの」と読みがあり＜楽曲＞のことらしいが、「ごくもの」には＜極物＞みたいな語感もあって、典型的な曲という言い方にも聞こえる。「典型的」とは、この場合＜如何にも子供っぽい←風雅に疎い夫にも分かり易い＞という意味に成りそうだ。

かかることどもを(こうした夫の対応振りや楽士の見え透いた取り入りを)、母君は、すこしもののゆゑ知りて、いと見苦しと思へば(母君は少し音楽方面に素養があったので、全く浅ましい有様と思って)、ことにあへしらはぬを(特には関わらないのを)、

「*吾子をば(妻はこの姫君を)、思ひ落としたまへり(連れ子より軽視していらっしゃる)」　*「吾子(あこ)」は後妻であるこの母君の子なのであり、母がこの子を粗末に思うはずも無く、あくまで夫の狂乱振りに呆れているわけだが、夫は妻に敬語遣いで、その素養の高さを認めて、自分の子育てに適切な助言を求めたい気持ちもありそうではある。だが、それは客観的な基準が知りたいと言うよりも、王家筋の助言で安心したい、または箔を付けたいという虚栄心によるもののようで、本気で王家を敬うなら、正に王家血筋である連れ子姫をこそ大事にすべきで、そうすることで伝統文化に近付き、その真髄の一端を知ることになるだろうに、その基本姿勢が夫にはないのだから、母君としては為す術が無いのだろう。とはいえ、私個人としては、どちらかと言えば常陸介の心情に同情したい。受領家に下ったからには、上から目線は許されない、と知るべきだ。ただ、連れ子姫を大事にするとなると、藤原大納言のように、殿が姫に女としての興味を持つ、ということにもなりそうで、程の良さはなかなか難しそうだ。

と、常に恨みけり(と夫は妻に常に不満を抱いていました)。

[第三段　左近少将、浮舟が継子だと知る]

かくて(ところで)、この少将(この少将が)、契りしほどを待ちつけで(約束の八月まで待ちきれずに)、「同じくは疾く(どうせなら早く)」とせめければ(と婚儀を急かせるので)、わが心一つに(母君は夫に相談せずに、自分独りで)、かう思ひ急ぐも(連れ子姫の婚儀を考えて準備を進めているのが)、いとつつましう(とても気懸かりで)、*人の心の知りがたさを思ひて(先方がこの姫が連れ子である事情を承知しているのか確認しようと考えて)、*初めより伝へそめける人の来たるに(初めからこの縁談を取持って伝言役を務めている少将方の縁者が、顔見知りの取次女房の所に遣って来た時に)、近う呼び寄せて語らふ(夫人はその仲立ちの人を近くに呼び寄せて話し合います)。　*「人の心の知りがたさ」は注に＜相手の少将の心中をさす。＞とある。「人」は＜少将＞で、「心」は＜姫が連れ子だと言う事情＞で、「知りがたさ」は＜知ることのし難さ＝知らない可能性＞で、それを「思ふ」ということは＜確認する必要を感じる＞ということだろうか。今さら口ごもるほど言い難いことでも無いだろうに、どうしてこんなに分かり難い言い方をするのか、不思議だ。　*「初めより伝へそめける人の来たるに」は＜初めからこの話を持ち込んできた人が来たので＞という言い方のようだが、姫方の窓口は姫付きの女房だろうが、「初めより伝へそめける人」は少将の文遣いをいう言い方ではなく、独立した立場の人を指し示していて、こういう言い方をする

という事は、その取次女房を少将自身は見知っておらず、少将の知人縁者でその女房を見知る者であり、少将と常陸介の縁を取持つ事で自身にも何らかの利が有りそうな人、ということになりそうだ。

「よろづ多く思ひ憚ることの多かるを(いろいろ気懸かりが多いのですが)、月ごろかうのたまひてほど経ぬるを(この数ヶ月熱心に求婚頂いておりますものの)、並々の人にもものしたまはねば(少将と申せば高官でいらっしゃるので)、かたじけなう心苦しうて(もったいなく恐縮に存じまして)。かう思ひ立ちにたるを(この度お受けさせて頂きたくお決め申すに付けても)、*親などものしたまはぬ人なれば(かの姫は父親がいらっしゃらない人なので)、心一つなるやうにて(私が独りで決めることになるので)、かたはらいたう(念のために)、うちあはぬさまに見えたてまつることもやと(行き違いがあるように早合点申し上げてはいまいかと)、かねてなむ思ふ(案じられています)。　*「親などものしたまはぬ人なれば」は注に＜「親」は父親をさす。浮舟が連れ子であることを初めて言った。＞とある。「親などものしたまはぬ」は＜親をお持ちでない＞で、この「親」が＜父親＞だということは、是を言っているのが母君だということもあるし、姫が母君の連れ子だという事情を読者は先に知らされているので、私にも是が＜父親＞と分かるわけだが、この言い方で「親」が必ず＜男親＞を指すということではないのだろう。それにしても、連れ子の事実が女房筋などから事前に知らされないなどという事がある、という事情こそが私には意外だ。が、現にこう書かれてあるのだから、こういうことは間々あったと思うべきなのだろうか。

若き人びとあまたはべれど(若い娘は多くいますが)、思ふ人具したるは(世話する男親が揃っている者は)、おのづからと思ひ譲られて(夫が然るべく取り図るだろうと任せていまして)、この君の御ことをのみなむ(私はこの連れ子姫の縁付けだけを)、はかなき世の中を見るにも(頼りない事情を思うに付けても)、うしろめたくいみじきを(案じられてなりませんので)、もの思ひ知りぬべき御心ざまと聞きて(少将殿は思い遣りのあるお方と聞いて)、かうよろづのつつましさを忘れぬべかめるをしも(このような縁談でいろいろある引け目さえ忘れたようにお受け申すにしても)、もし思はずなる御心ばへも*見えば(もし後になってお見捨てがあると)、人笑へに悲しうなむ(人聞きも悪く悲しいことですので)」　*「見えば」は、「見ゆ」がヤ行下二段活用なので、未然形の「見え」に場合想定項を成す助詞「ば」が付いた＜将来にそうなるなら＞という言い方で、已然形の「見ゆれば」で＜現在そうであるなら＞と言っているのではないが、此処で姫が連れ子という新しい情報を知らせたのだから、今日の話で気が変わるなら、と実質では限りなく現在形に近い打診を、あたかも結婚後のような先の話のように遠回しな言い方をして、双方が傷付くのを避ける大人の言葉遣いになっているようだ。

と言ひけるを(と夫人が言ったのを)、*少将の君に参うでて(取持ちの仲立ちは少将君の所に参上して)、　*「せうしゃうのきみ」は姫に結婚を申し込んだ左近少将だが、二条院の対の御方付きの女房に「少将」というあだ名の者が居たのを、ふと思い出した。

「しかしかなむ(こういう事情です)」

と申しけるに(と申したところ)、けしき悪しくなりぬ(少将の機嫌は悪くなりました)。

「初めより、さらに(初めからは、さらさら)、*守の御娘にあらずといふことをなむ聞かざりつる(かの姫が守の実の娘ではないなどと聞いていない)。*同じことなれど(受領家の蓄財が期待できる前常陸介家に縁付くことには、同じことだが)、人聞きもけ劣りたる心地して(母親の連れ

子姫で夫に疎まれているということでは、そういう者と知ってまで縁付いて、受領家に取り入るのかと、人聞きも悪く思われ)、出で入りせむにもよからずなむあるべき(養父家に出入りするにも肩身が狭いに違いない)。ようも案内せで(よく調べもせずに)、浮かびたることを伝へける(あなたは私に、思い付きで取持ったのだな)」　*「守の御娘(かみのみむすめ)」は＜守の実の娘＞をいう言い方らしい。「御娘」を「みむすめ」と読むのも意外だが、「御娘」が必ず＜実の娘＞を指す言い方のようにも思えない。此処ではそういう意味になる、ということなのだろう。　*「同じこと」とはどういう意味なのか。若い姫君も同じ母君腹なので、確かに「同じこと」ではありそうだ。が、此処ではその血筋としての正妻腹か妾腹かが問題なのでは、そもないだろう。が、問題の本質は同じかも知れない。妾腹子であっても、父親が認知して本家の娘として育てれば、その娘の社会的な立場は正妻腹子と変わらない。その娘を娶ることは、その父を養父に頂くことであり、その父にしても婿を養子に迎える、という縁付けになるわけだ。が、認知されない妾腹子は個人的な援助を偶に実父から受ける事があったとしても、社会的な立場は母親の実家の家格であり、その実家とは娘から見て祖父だが、その祖父が存命で実勢がある内はそれなりの恩恵が期待できるが、賞味期限が迫っている商品は安売りされるし、期限切れは処分される。この連れ子姫の基本的な立場は、正に故八宮に認知されなかった期限切れ商品だ。ただ、その母親が、それこそ祖父の恩恵で、この常陸介の後妻に収まったので、この連れ子姫は常陸介家の娘として送り出されはする。が、この娘を、延いてはその婿を、重遇するかどうかは偏に常陸介の腹積もりに掛かっている。それが、母君の言葉によると「心一つなるやうにて」と事情説明されたのである。常陸介はこの姫を親身に思っていないのだ。実質、この姫は妾腹子の立場に置かれているのである。見かけがテテナシゴで無い分、変形型だが、世にも稀な例ということでもなさそうだ。即ち、この「同じこと」は＜常陸介と縁付くことには変わりない＞という外形認識だと知れる。尤も、斯くも口説口説と能書きを垂れるまでも無く、下に「出で入りせむにも」と明示されてもいるが。

とのたまふに(と少将が仰るので)、いとほしくなりて(仲立ちは困って)、

「詳しくも知りたまへず(詳しい事情を存じませずに)、*女どもの知るたよりにて(女房連中の話であの家に年頃の娘がいると知り)、*仰せ言を伝へ始めはべりしに(御手紙を取り次ぎ申し始めたのですが)、中にかしづく娘とのみ聞きはべれば(特に大事に世話している娘とばかり聞いておりましたので)、守のにこそは、とこそ思ひたまへつれ(常陸介の実子に違いないと存じまして)、*異人の子持たまへらむとも(母君が別の父親の子を連れていらっしゃったものとは)、問ひ聞きはべらざりつるなり(尋ね聞いておりませんでした)。　*「女どもの知るたよりにて」は注に＜仲人の妹が浮舟に仕えていた。その情報から仲人に入った。＞とある。であるなら、この姫が後妻の連れ子である事や、常陸介から大事にされていないことを、この仲人が知らなかったというのは尚更信じ難いが、まぁ仕方ない。　*「おほせごと」とは話し相手である少将に対する敬語遣いだろうから、是は＜少将からの恋文＞なのだろう。ただ、敬語遣いをするべき人としては母君も考えられるので少し紛らわしいが、この時点では仲人は母君の話を直接聞いてはいなかったようだし、立場の独立性からしても、母君の言葉なら「さる」とか「かの」と離れた言い方になるだろう。　*「ことびとのこ」とは＜別の父親の子＞という言い方らしい。この「持たまへらむ」は「持たまへり」という状態表現に意志の助動詞「む」が付いた言い方で、連れ子をする意志を持っていたのは母君なので、主語は守ではなく母君だ。

容貌、心もすぐれてものしたまふこと(姫の容姿や教養も優れていらっしゃることを)、母上のかなしうしたまひて(母上が愛しみなさって)、おもだたしう気高きことをせむと(立派な貴家に嫁がせたいと)、あがめかしづかると聞きはべりしかば(大事に育てられていると聞いておりましたところ)、いかで*かの辺のこと伝へつべからむ人もがな(あなた様が、何とかあの受領家との縁組を取り持ってくれる人がいないものか)、とのたまはせしかば(と仰ったので)、さるたより

知りたまへりと(こういう伝手がありますと)、取り申ししなり(取持ち申したまでです)。さらに(何も一向に)、浮かびたる罪(軽はずみだなどと言う誹りを)、はべるまじきことなり(受ける覚えはありません)」　*「かのへんのこと」とはずいぶん曖昧な言い方だが、「伝へつ」が＜話をつける＝結婚をまとめる＞だから「かのへん」が＜あの受領家＞で、「のこと」が＜の娘と縁付ける＞を意味するのだろう。曖昧な分、当人には其と分かる核心を体裁を付けずに本音で突いた、という言い方になるようで、攻撃は最大の防御とばかりに反転攻勢を仕掛けたらしい。

と、*腹悪しく言葉多かる者にて、申すに(と遠慮なく語気荒く反論する者のように申すので)、君、いとあてやかならぬさまにて(少将君もまるで取り澄ますこと無く)、　*「はらあし」は大辞泉に＜意地悪い。腹黒い。＞ともあるが＜おこりっぽい。短気である。＞ともあって、此処では「腹」に付いてだから気質・性格のことを示すようだが、「悪し(あし)」は＜邪悪＞という語感ではなく＜険悪だ→語気が荒い＞という意味に取って置く。また、「者にて」の「にて」は＜なので＞という理由説明ではなく、「いとほしくなりて」を受けた＜～として＞という形態形容語用だろう。

「かやうのあたりに行き通はむ(あのような受領ふぜいの家に通じようというのは)、人のをさをさ許さぬことなれど(高家の歴史や誇りなどの体面を損なう財産目当てだと、世間はあまり良くは言わないが)、今様のことにて(昨今では普通の事で)、咎あるまじう(問題にならないし)、もてあがめて後見だつに(受領家の方でも、自家の格式を上げるのに高家筋を婿に迎えて、厚遇し後ろ盾になるので)、罪隠してなむあるたぐひもあめるを(面目が立つ例もあるようだが)、同じことととうちうちには思ふとも(連れ子姫であろうと、同じ受領家の娘だとは私自身が納得しても)、よそのおぼえなむ(世間体としては)、へつらひて人言ひなすべき(そこまで形振り構わずに取り入るのかと口悪く言うことだろう)。

*源少納言、讃岐守などの(先妻の娘たちを娶った源少納言や讃岐守が)、うけばりたるけしきにて出で入らむに(威勢を張った態度で養父家に出入りするというのに)、守にもをさをさ受けられぬさまにて交じらはむなむ(守にも然して有難がられずに婿の仲間入りをするのは)、いと人げなかるべき(実に情けないじゃないか)」　*「源少納言(げんせうなごん)、讃岐守(さぬきのかみ)」は注に＜いずれも常陸介の先妻の娘の夫たち。少納言は従五位下、讃岐守は上国の国守、従五位下相当官。少将は正五位下で彼等より上位。＞とある。文脈から知れる事情、ということなのだろうか。従って補語する。

とのたまふ(と本音を仰います)。

[第四段　左近少将、常陸介の実娘を所望す]

この人(この仲人は)、追従あるうたてある人の心にて(人を煽てて取り入って利を得ようとする卑しい気質の人で)、これをいと口惜しう(これで破談になるのを残念に)、こなたかなたに思ひければ(少将にとっても、常陸介にとっても、延いては自分にとっても、思ったので)、

「まことに守の娘と思さば(真に守の実の子をとお思いなら)、まだ若うなどおはすとも(まだ若くいらっしゃるが)、しか伝へはべらむかし(そのようにあなたの意向をお伝え申しましょう)。*中にあたるなむ(その妹に当たるのが)、姫君とて(姫君といって)、守、いとかなしうしたまふなる(守がとても可愛がっていらっしゃるようです)」　*「中(なか)」は注に＜北の方の二番目の娘。常陸

介との間にできた最初の娘。＞とある。「なか」という言い方については、古語辞典に＜(中国で兄弟の順序を「伯仲叔季」とするが、その「仲」を訓読したものか)多くの兄弟姉妹のうちそれぞれの第二番目。＞とある。守には先妻との間に娘が二人はいたようなので、なるほど後妻の二番目という言い方らしい。しかし、やはりこの仲人は十分に事情を知っていたようだ。食えないヤツ、みたいな。

と聞こゆ(と申します)。

「いさや(いやしかし)。初めよりしか言ひ寄れることをおきて(初めには姉姫に言い寄ったことを差し置いて)、また言はむこそうたてあれ(妹に乗り換えるというのは節操に欠く)。されど、わが本意は(とはいえ、確かに私の本心は)、かの*守の主の(あの守の御主人が)、人柄もものものしく(人柄も立派で)、大人しき人なれば(頼れる人なので)、後見にもせまほしう(後援者になって欲しいと)、見るところありて思ひ始めしことなり(見込んで考え始めた縁組なのだ)。*もはら顔、容貌のすぐれたらむ女の願ひもなし(何も顔や容姿の優れた妻を得たいという願いからではない)。品あてに艶ならむ女を願はば(上品で風流な女が欲しいなら)、*やすく得つべし(容易に得られるのだから)。　*「守の主」は「かんのぬし」と読みがある。「ぬし」は＜ひとかどの人＞という敬意を示す＜御主人＞くらいの尊称だ。　*「もはら」は＜専ら、他事は差し置いて一事に専念して＞の古語らしいが、現代語の「もっぱら」には此処にあるような否定語用は、特に可笑しさを意図しなければ、通用しない。似たような語で現代語で否定語用されるのは「もはや」だが、元々この二語は同じ概念の訛りだったのではないか。語感からは＜もう他のものは無いように＞という印象があって、「や」が＜やう、様＞なのは分かり易いが、「ら」も＜らし、らく＞の形容語尾語用があることからして＜何かの存在＝把握認識＝形態・状態・容態・様態＞を表現する語ではあるのだろう。　*「やすく得つべし」は、「得つ(えつ)」が＜出来てしまう、そうしている＞という言い方なので、「べし」は可能意ではなく当然意で＜～なのだから＞という理由説明構文を成すのだろう。それにしてもこの言い方は、近衛府の少将という高い身分であってみれば、縁談にしても召して囲うにしても、特別な絶世の美女でもなければ、いくらでも靡く女はいた、ということらしく、下世話な者としては身分制度の形式主義には辟易しつつも、その不自由の無い安泰生活にはやはり羨望を覚える。それに、絶世ではないほどほどの女こそが、総合的に最上の快適さを与えてくれそうな気がする今日この頃でもある。

されど(しかし、左様な生活態度で)、*寂しうことうち合はぬ(時流に乗り損ねて、実勢を失うことが重なった)、みやび好める人の果て果ては(風雅を好む人の行く末は)、ものきよくもなく(粗末な暮らしぶりで)、人にも人ともおぼえたらぬを見れば(一人前に扱ってもらえないのを見れば)、すこし*人にそしらるとも(すこし母上には反感を持たれても)、なだらかにて世の中を過ぐさむことを願ふなり(私は安泰な生活を願うのです)。守に、かくなむと語らひて、さもと許すけしきあらば(守に私の意向をこのようだと取り持って、守が妹姫との婚儀を許す意向があるなら)、何かは、さも(何れ娘御との縁談であり、そのような行き違いは、別に大した事ではない)」　*「さびしうこと」とは何か。「さぶ」は＜古びる、廃れて勢いが無くなる、衰える＞だから、それらが重なるという事は、年老いて退官し俸禄も地位利用の権益も失い、知人縁者に死に別れて寂しく死期を待つ、みたいなことだろうか。「果て果て」とあるのだから＜老後の末路＞ではあるのだろうが、何もその為の中央官僚の備えが受領との縁付けだけとも思えないが、それだけこの時代の受領の勢いの凄まじさを物語る言い方、ではあるのかも知れない。だから、時流に乗り遅れる、という文意があると解して左様補語する。　*「人」は、「心一つなるやうにて」(三段)という事情を心配して、少将に婚意の確認を取って来た＜母上＞を指すのだろう。

とのたまふ(と仰います)。

[第五段　常陸介、左近少将に満足す]

*この人は、妹のこの西の御方にあるたよりに(この仲人は妹が常陸介家の西部屋に住まう連れ子姫の女房である伝手で)、かかる御文なども取り伝へはじめけれど(少将の恋文なども取り持ち始めたが)、守には詳しくも見え知られぬ者なりけり(主人の守には良く見知られていない者なのでしたが)、*ただ行きに(伝言無用と厚かましく)、守の居たりける前に行きて(守の居室の前まで進み通って)、　*「この人」は＜仲人＞で、「にしのおおんかた」は＜連れ子姫およびその社中＞のことらしい。此処は、その仲人が端役として活躍する一幕らしく、そこで改めて、その立場を補足説明する語りのようで、「妹の～者なりけり」が挿入句となっている構文らしく、「この人は」は「ただ行きに」に繋がる文意だ。が、それにしても相変わらずの唐突な語り出しで、文意が分かった後では、この「この人」と話し出す語り手の気分も分かるような気もするが、いきなり「この人」と言われた時点では誰のことか戸惑う。まして、「西の御方」については、それがが＜連れ子姫＞のことであるとか、そも「西の御方」は寝殿の西側なのか、西の対屋などを指すのかすら分からない。それに、補足説明とは言ったが、そもこの人物については、女房の仲間内では＜大体そんなような人＞くらいの心当たりが有るのかも知れないが、私には、少将の縁者らしいような気はするが、それ以上に何一つと間柄や身分が分かる説明は無かったし、今も無い。当時の世情を研究している専門家諸氏に可能性のある類例などを示してもらえると、私のような素人読者には助かるが。　*「ただいきに」は古語辞典に＜「ただ行きに行く」の意味＞とあり＜ひたすら前進する＝どんどん進む、ずけずけと通る＞さまの形容句らしい。

「とり申すべきことありて(折り入ってお話しがあります)」

など言はす(などと守の側近に取り次がせます)。守(かみ、主人の守は)、

「このわたりに時々出で入りはすと聞けど(当家に時々は出入りする者と聞くが)、前には呼び出でぬ人の(面識の無い者が)、何ごと言ひにかあらむ(何の用か)」

と、なま荒々しきけしきなれど(と異様さに険しい表情だが)、

「左近少将殿の御消息にてなむさぶらふ(左近少将殿の使いに参じました)」

と言はせたれば(と取り次ぎ申させたので)、会ひたり(面談に応じました)。*語らひがたげなる顔して(仲人は大声が憚られる私的な御用という顔付きで、事改まったように)、近うゐ寄りて(守に近寄って座すと)、　*「語らひがたげなる顔」は＜言い出し難そうな表情＞という言い方で、注には＜『集成』は「常陸の介の不愛想な態度をちらちらうかがう面持」。『完訳』は「話題を切り出しにくい表情で。介の態度にも、いささかためらう」と注す。＞とある。が、この計算高い仲人が、此処に来て恐る恐るになるというのは解せない。是は演出で、その実＜勿体をつけて＞守の興味を引こうという作戦と見た方が面白いだろう。左近少将の身分は地方官とは段違いに高いはずだ。

「月ごろ(数ヶ月前から)、内の御方に消息聞こえさせたまふを(少将殿は御内儀に姫との婚意を申し入れなさっていましたが)、御許しありて(この度ご承諾を頂きまして)、*この月のほどにと契りきこえさせたまふことはべるを(この秋の八月頃に婚儀をと約束申しなさっているのです

が)、日をはからひて(日取りを図って)、いつしかと思すほどに(何時にするか決めようかと思っている時に)、ある人の申しけるやう(ある近親者が言うには)、　*「この月」は＜この秋の八月＞という言い方らしく、今が＜八月＞ということではないらしい。確かに、今月の話では時間が無さ過ぎる。注には＜八月をさす。九月は結婚を忌む季節の末の月となる。＞とある。

『まことに北の方の御はからひにものしたまへど(大変に結構な奥方のお取り計らいではいらっしゃるが)、守の殿の御娘にはおはせず(その姫は守殿の御子ではいらっしゃらないので)、君達のおはし通はむに(貴公子がお通いなさるには)、世の聞こえなむへつらひたるやうならむ(世評では不当にへりくだったように思われよう)。*受領の御婿になりたまふかやうの君達は(受領の婿殿に成りなさろうというような貴公子は)、ただ私の君のごとく思ひかしづきたてまつり(その財産家が偏に家来として主君のように思って大事に御世話申し上げ)、*手に捧げたるごと(まるで宝玉を両手で高くさし上げるように)、思ひ扱ひ後見たてまつるにかかりてなむ(思い扱って後援申し上げるということがあってこそ)、*さる振る舞ひしたまふ人びとものしたまふめるを(その財産家の地位を引き上げることに尽力なさる人もいらっしゃるようだが)、さすがにその御願ひはあながちなるやうにて(継子の婿という事では、そういう期待は持てそうも無いので)、をさをさ受けられたまはで(財産家の厚遇にあまり浴しなさらず)、け劣りておはし通はむこと(劣った立場で出入りなさるという)、便なかりぬべきよし(筋の悪い話になるのではないか)』　*「受領(ずりゃう)」と当の本人を前にして言う所を見ると、この呼び方は＜管理権限者殿=社長＞というくらいの尊称だったのかも知れない。どこまで公式の呼称かは分からないが、少なくも蔑称ではありえない。　*「手に捧げたるごと」は注に＜『河海抄』は「如捧手、掌上珠と云体なり」と注す。＞とある。「捧ぐ」は＜両手で物を高くさし上げる＞と古語辞典にある。中央高家の権威誇示。　*「さる振る舞ひ」は注に＜高貴な家の子弟と受領の娘の縁組。＞とある。が、「ふるまひ」には＜応対する＝その厚情に応えて尽力する＞という語感に私には聞こえる。それは高家が受領家の恩に報いる働きであり、計算高い仲人が、受領家にとっての高家と縁組することの利を説くのは、常套の説得工作だろう。所謂、クスグリだ。

をなむ(ということを)、切にそしり申す人びとあまたはべるなれば(本気で案じて注意申し人たちが大勢居りますので)、ただ今思しわづらひてなむ(今現在、悩んでいらっしゃって)、

『初めよりただきらぎらしう(私は初めから前常陸介殿を、偏に威勢があり)、人の後見と頼みきこえむに(後援を期待申すのに)、堪へたまへる御おぼえを選び申して(十分でいらっしゃるとの御評判を選考申して)、聞こえ始め申ししなり(結婚の申し込みをし始めたのです)。さらに、異人ものしたまふらむといふこと知らざりければ(その相手の姫が、まさか別の父親をお持ちでいらっしゃるということを知らなかったので)、もとの心ざしのままに(私の最初の意向に即して、婿持て成しが期待できる)、まだ幼きものあまたおはすなるを(守殿の愛娘がまだ幼いながら大勢いらっしゃるのを)、許いたまはば(相手にお許しいただければ)、いとどうれしくなむ(たいへん嬉しいのだが)。御けしき見て参うで来(守殿の御意向を確かめて参れ)』

と仰せられつれば(と仰せ付けられまして、私が参じた次第です)」

と言ふに(と言うと)、守(守は)、

「さらに、かかる御消息はべるよし、詳しく承らず(一向に左様な御意向があったこと詳しく存じませんでした)。まことに同じことに思うたまふべき人なれど(その姫も実子と同様に思い申すべき人ですが)、よからぬ童べあまたはべりて(手の掛かる小児が他に多くいまして)、はかばかしからぬ身に(至らぬ身ながら)、さまざま思ひたまへ扱ふほどに(いろいろと考えて育てている内に)、母なる者も(母親の方が)、これを異人と思ひ分けたることと(この姫を私が他の子と差別していると)、くねり言ふことはべりて(ひがみ言を言い出しまして)、ともかくも口入れさせぬ人のことにはべれば(私には一切口出しさせない人の事でございまして)、ほのかに(婚儀の件も少しは)、しかなむ仰せらるることはべりとは聞きはべりしかど(それらしいお話しがあるようには聞いておりましたが)、なにがしを取り所に思しける御心は(私を評価して下さる少将殿のお気持は)、知りはべらざりけり(存じませんでした)。

さるは、いとうれしく思ひたまへらるる御ことにこそはべるなれ(それは実に嬉しく存じられるお話しでございます)。いとらうたしと思ふ女の童は(とても可愛く思う愛娘は)、あまたの中に(大勢いる子供たちの中でも)、これをなむ命にも代へむと思ひはべる(これは命に代えても守ろうと大事に思っております)。のたまふ人びとあれど(この娘に求婚なさる人たちもいますが)、今の世の人の御心、定めなく聞こえはべるに(今時の若い人の御気持は頼りなく思い申しまして)、なかなか胸いたき目をや見むの憚りに(却って姫が可哀相な目に遭ってはと懸念されて)、思ひ定むることもなくてなむ(相手を決めかねております)。

いかでうしろやすくも見たまへおかむと(何とか安心できる相手に嫁がせたいと)、明け暮れかなしく思うたまふるを(毎日愛しく見守っておりますが)、少将殿におきたてまつりては(少将殿に於かれましては)、*故大将殿にも(御尊父の亡き大将殿にも)、若くより参り仕うまつりき(私は若い時からお仕え申していました)。*家の子にて見たてまつりしに(その大将家の家来として拝見申しましても)、いと*警策に(御子息でいらっしゃる少将殿は非常に優秀で)、仕うまつらまほしと(お仕え申したいと)、心つきて思ひきこえしかど(常日頃から思い申しておりましたが)、遥かなる所に(遠い東国へ)、*うち続きて過ぐしはべる年ごろのほどに(陸奥、常陸と引き続いて赴任して長かったもので)、うひうひしくおぼえはべりてなむ(お近付きも憚られまして)、参りも仕まつらぬを(お仕えにも参じませんでしたが)、かかる御心ざしのはべりけるを(こうした御意向がお在りでしたとは)。　*「こだいしゃうどの」は注に＜左近少将の父。＞とある。「故」という言い方に＜面識のある先代の＞という語感があるのだろう。 *「家の子にて」は注に＜わたしが大将殿の家来として少将の幼いころから拝見してきた、意。＞とある。　*「警策(きゃうざく)」は＜驚くほど優れている＞と古語辞典にある。　*「うち続きて」は注に＜陸奥国、常陸国の国守を歴任。＞とある。

返す返す(直ぐにも)、仰せの事たてまつらむは*やすきことなれど(仰せの通りに娘を差上げるのは結構なお話しと承りますが)、月ごろの御心違へたるやうに(これまでのお話しと違うように)、この人、*思ひたまへむことをなむ(妻が存じましょうことを)、思うたまへ憚りはべる(思いまして懸念されます)」　*「やすし」は「易し(面倒ではない)」ではなく「安し(良好だ)」。　*「思ひたまへむ」の「たまふ」は妻に対する敬語ではない。注にも此処の語用について＜妻の北の方が存じますこと。「たまふ」は謙譲の補助動詞。＞とある。まぁ、客人に向かって話す時に妻に敬語を使う事自体が有り得ないので、こういう言い方になる、と思えば良いのだろう。が、何となく文法整理がしたくなったので、少し考える。で、未来予測を示す助動詞「む」は活用語の未然形に付けて使うので、敬語の「たまふ」はハ行四段活用なので、その未然形は「たまは」で

あり、それに「む」が付けば「たまはむ」という言い方になる。しかし、謙譲の「たまふ」はハ行下二段活用なので、その未然形は「たまへ」であり、それに「む」がつくと「たまへむ」となる。という説明は尤もらしいが、どうも分かったような分からないような半端な気分がする。元々「たまふ」は話者が誰かに敬意を示す丁寧語で、話題対象自体に敬意を表した場合は、その対象の主体動作が四段活用で示され、聞き手に敬意を表した場合は、話者自身や身内を聞き手または伝言相手に対して受身表現の下二段活用で示す、という語用をしているようにも見えるが、そう言ってみてもヤヤコシイ。やはり、こういう言い方になる、と思えば良いのかも。

と、いと*こまやかに言ふ(と実に細かい点まで目先の利いた話をします)。　*「こまやかに」は、此処では＜愛情深く＞ではなく＜細かな事情にまで立ち入る＞という意味のようで、此処までの仲人の話で混み入った事情を察したらしい常陸介の才気を窺わせる。

[第六段　仲人、左近少々を絶賛す]

よろしげなめりと(上手く行きそうだと)、うれしく思ふ(仲人は嬉しく思います)。

「*何かと思し憚るべきことにもはべらず(あまりご懸念なさるには及びません)。かの御心ざしは(少将殿の御意向は)、ただ一所の御許しはべらむを願ひ思して(ただあなた様お一人の御許しがあるのを願いなさって)、『いはけなく年足らぬほどにおはすとも(妹姫はまだ幼く年少でいらっしゃるにしても)、*真実のやむごとなく思ひおきてたまへらむをこそ(実の子でこの上なく大切になさっている姫を貰い受けてこそ)、本意叶ふにはせめ(本意に適うのであり)、もはら*さやうのほとりばみたらむ振る舞ひすべきにもあらず(この上は、夫人が一存でお決めになったような見くびられた結婚はしない)』と、なむのたまひつる(とのように仰っていました)。　*「何かと思し憚るべきことにもはべらず」は注に＜以下「とり申すなり」まで、仲人の詞。＞とある。しかし、この仲人の弁は私には信じられないほどの厚顔高慢に聞こえる。夫が妻の懸念を家庭事情として心配しているのに、余所者の、仮に主人筋に当たる少将殿の使いとは言え、代理人に過ぎない仲人ふぜいが、当家の主人である夫の守に＜あなたが責任者なのだから、あなたの一存でお決めになれば良い＞と言って退ける僭越ぶりだ。どういう展開を見せるのかと、それなりに興味を持って読んで来たが、こういう場面に出くわすとは予想外で少し驚いた。それも、決して良い意味で、では無い。ただ、是も現にこういう実相はあったのだろうし、その予想外の展開をむしろ興味深く捉えて、中央官僚の地方官を見下す意識と、それが普通だったらしい世相が示されたものとして、読み進む他はなさそうだ。　*「真実」は「しんじち」と読みがある。此処では＜守の実子＞のことらしい。　*「さやうのほとりばみたらむ振る舞ひ」とは＜そのような守の与り知らない夫人だけが決めた婚儀に応じる脇役めいた婿入り＞という意味のようで、「ほとりばむ(端役めく)」のは少将自身だが、それは御免被る、という言い方をすることで、間接的に夫人を＜端役に過ぎない＞と切り捨てている。というより、むしろ、受領家に少将家が軽々しい扱いを受けた、と夫人を、延いては常陸介家体制、また常陸介自身をも非難しているのであり、どうもこの仲人の手口は、少しでも相手が弱気を見せると、どんどん其処を責め続ける、という性向があるようだ。

人柄はいとやむごとなく(少将殿は品性がとても尊く)、おぼえ*心にくくおはする君なりけり(世間の評判も抜きん出ている方なのです)。若き君達とて(若い貴公子といっても)、好き好きしくあてびてもおはしまさず(風流ぶって気取ったりなさらず)、世のありさまもいとよく知りたまへり(世情も良く御存じです)。領じたまふ所々もいと多くはべり(お持ちの荘園もとても多くあります)。まだ*ころの御徳なきやうなれど(まだ盛りの御栄達ではないようですが)、おのづから

やむごとなき人の御けはひのありげなるやう（自然と高貴な人の御資質が備わっているようで）、*直人の限りなき富といふめる勢ひには、まさりたまへり（並の身分の者が莫大な財産と威勢を張るよりは格上でいらっしゃいます）。来年、四位になりたまひなむ（来年には四位にお成りでしょう）。こたみの*頭は疑ひなく（次期蔵人頭がこの少将になるのは疑いなく）、帝の*御口づからごてたまへるなり（天皇が直に仰せになったのです）。　*「こころにくし」は単に＜優れている＞または＜なかなか良い＞くらいの言い方なのかもしれない。が、現代語の「心憎い」は＜用意周到さに下を巻く＞とか＜意外な点を突いていて感心する＞とか、何処か＜出し抜いた＞感があるので、此処でも＜抜き出た＞として置く。　*「ころ」は「頃合ひ（潮時・時機）」のことらしい。「御徳（おおんとく）」は＜御名声・御威勢＞みたいなことらしいが、具体的には＜出世・地位・身分＞なのだろう。　*「直人（なほびと）」は＜並の身分の貴族＞らしい。この常陸介も「上達部の筋にて」（二段）とあったので、面と向かって名指ししているのではないのだろうが、近衛の高官が見得を切れば天皇の権威を振りかざすに等しいので、ほとんど＜おまえたち地方官とは格が違う＞と言っているようなものだ。*「頭（とう）」は注に＜蔵人頭。『完訳』は「蔵人頭への昇進。蔵人頭には熱意ある四位の者が選ばれ、上達部昇進の道も開ける。容易ならざる昇進。「帝の御口づから」ともあり、仲人口の出まかせの発言」と注す。＞とある。蔵人所は天皇の私的な側近者という色合いが濃く、公務員と言っても近親者登用がありえるだろうが、衛府は制圧権力なので実力で諸侯に重しが効く人物でなければ務まらず、頭中将が天皇の側近者で且つ実力者である事を示す役職名だったろうことは想像に難く無い。　*「御口づから（おおんくちづから）」は＜天皇自身の口から＞。「づから」は＜「の」の意味の格助詞「つ」に、名詞「から（故）」がついて濁音化し、接尾語化したもの＞と古語辞典に説明がある。「ごつ」は＜仰せになる＞。過去事象を示す助動詞「つ」に敬称の「御」をつけた「御つ」だろうか。辞書にはそういう説明も無いので、別の語だろうか。それにしても、さすがに天皇が軽々に人事を口にはしないだろうし、仮に本当の腹心などにはそれらしい冗談を言うことがあっても、それがまことしやかに外に洩れたのでは諸氏が浮き足立って、体制秩序が維持できない。本当に口から出任せの仲人だ。

『よろづのこと足らひてめやすき朝臣の（何不足無く信頼できる我が家臣が）、妻をなむ定めざなる（まだ妻を得ていない）。はやさるべき人選りて（早く然るべき人を求めて）、後見をまうけよ（後援者を設けなさい）。上達部には（そうして実力が備われば、政府高官には）、我しあれば（この私をして）、今日明日といふばかりになし上げてむ（今日明日にでも昇進させよう）』とこそ仰せらるなれ（とまで帝は仰せなのですから）。何事も、ただこの君ぞ（何事に於いても正にこの少将殿が）、帝にも親しく仕うまつりたまふなる（帝にも親しくお仕え申しなさっているということですから）。

御心はた（少将殿は御考えもまた）、いみじう警策に（非常に目を見張るほどに）、重々しくなむおはしますめる（慎重でいらっしゃいます）。あたら人の御婿を（そういう少将殿が熟慮なさったこの折角の御申し込みを）、かう聞きたまふほどに（この私の話をお聞きなさる内に）、思ほし立ちなむこそよからめ（お決めなさるべきでしょう）。かの殿には、我も我も婿にとりたてまつらむと、所々にはべるなれば（少将殿には我も我もと婿に迎え入れようと方々から御声がありますので）、ここにしぶしぶなる御けはひあらば（此方で渋っている御様子なら）、他ざまにも思しなりなむ（他をお考えになるでしょう）。これ、ただうしろやすきことをとり申すなり（私はただ良縁を取り持ち申しているだけです）」

と、いと多く（と仲人は実に多弁で）、よげに言ひ続くるに（少将殿の将来有望を説いて、この縁談がいかにも結構な話のように言い続けるのを）、*いとあさましく鄙びたる守にて（守は実に

功利的で上昇志向の地方官なので)、うち笑みつつ聞きゐたり(愉快そうに聞いていました)。　*「いとあさましくひなびたる」は＜とても浅慮で田舎臭い＞だが、このような厚顔無礼な仲人の話を真に受けるという、私の予想を超えた下劣ぶりなので、この二人は如何にも実相としては有り得そうだが、それだけにより具体的な意味合いで言い換えて置きたい。

［第七段　左近少将、浮舟から常陸介の実娘にのり換える］

「このころの御徳などの心もとなからむことは(今現在の御身分が意に満たないことは)、なのたまひそ(仰いますな、仰らずとも身供は承知致しております)。なにがし命はべらむほどは(身供の命ある内には)、頂に捧げたてまつりてむ(敬って後援させて頂きます)。心もとなく(人事の根回しに心配だと)、何を飽かぬとか思すべき(もう資金不足を考え下さいますな)。たとひあへずして仕うまつりさしつとも(たとえ私が死んで中途になっても)、残りの宝物(遺産の財宝や)、領じはべる所々(多くの荘園を)、一つにてもまた取り争ふべき人なし(この娘一人に譲って他に取り争う者はいません)。　*「このころの御徳などの～」は仲人が言った「まだころの御徳なきやうなれど」(六段)を受けての守の物言いだろうが、注には＜「御徳」は少将の収入。そのため「御」がつく。＞とあり、「心もとなし」は＜不如意だ、不自由だ＞だから、どうやら＜まだ出世が遅れている＝成長株だ＞と売り込んだ仲人の意図とは少しずれて、少将が＜不満だ＞という文意に守には取られていて、その＜「不満」の実体＞は＜低所得＞だと思い込まれているようではある。是が守の「いとあさましく鄙びたる」表れなのだろうか。ただ、それは読者が感じ取れば好い文意であって、この「御徳」を本文表現として＜御収入＞と言い換えてしまうのは、私には少し疑問だ。少将には荘園も多いとも語られていたし、生活に要する所得ということでは、特段に不足していたとは思えない。表向きにも実体でも、やはりこの「御徳」は権勢を張るに足る＜御身分、御地位＞を指していると読むべきかと思う。

子ども多くはべれど(子供は多くいますが)、これはさま異に思ひそめたる者にはべり(この娘は特に可愛がっている子でございます)。ただ真心に思し顧みさせたまはば(少将殿が、ただ本当にこの娘を大事にお守りくださるなら)、大臣の位を求めむと思し願ひて(大臣の位が欲しいとお望みなさって)、世になき宝物をも尽くさむとしたまはむに(世にまたと無い高価な宝物を使い果たそうとなさっても)、なきものはべるまじ(無い物はありません)。

*当時の帝、しか恵み申したまふなれば(今上帝がそのように少将殿を有難く申しなさるのなら)、御後見は心もとなかるまじ(御出世間違い無しでしょう)。これ(この縁談は)、かの御ためにも(其方の少将殿にとっても)、なにがしが女の童のためにも(此方の娘にとっても)、*幸ひとあるべきことにやとも知らず(この上ない良い話なのではないか、だというのに、そうとも知らず、数ヶ月と他人事だったとは)」　*「当時の帝(たうじのみかど)」は＜今上帝＞をいう言い方らしい。　*「さいはひとあるべきことにや」の「や」は間投助詞ないし詠嘆詞語用。「とも知らず」は下に＜居り侍り＞などを言い差した余韻表現、だろう。

と(と守が)、よろしげに言ふ時に(話が纏まったように言うので)、いとうれしくなりて(仲人はとても嬉しくなって)、妹にもかかることありとも語らず(妹にもこういう次第だったとも語らず)、あなたにも寄りつかで(夫人の部屋にも寄り付かずに)、守の言ひつることを(守の言ったことを)、「いともいともよげにめでたし(上々の首尾だ)」と思ひて*聞こゆれば(と思って少将に報告申せば)、君(少将君は)、「すこし*鄙びてぞある(無理が無理なく通るとは出来過ぎて、す

こし田舎芝居めいてるな)」とは聞きたまへど(とは思いなさったが)、憎からず(常陸介家を御し易い相手だと)、うち笑みて聞きゐたまへり(満足して聞いていらっしゃいました)。大臣にならむ*贖労を取らむなどぞ(大臣になるための資金を出そうなどと言うのは)、あまりおどろおどろしきことと(あまりに大袈裟なと)、*耳とどまりける(印象に残ります)。　*「聞こゆれば」は注に＜仲人が左近少将に。＞とある。確かに分かり難い。　*「ひなびてぞある」は実相をなぞった話らしいので楽屋オチでもあるのだろう。　*「贖労(ぞくらう)」は＜財物を納めて官職を得ること。＞と注にある。裏金と言うよりは半ば制度化していたような説明もあり、それだけに端役を得たものが顔役に納める謝礼金みたいな、売り手市場が制度化された身分制度の悪癖という印象だが、大臣位は諸勢力を黙らせる実力が無ければ務まらないので、そうした形式礼示で事は収まらないだろう。「取る」は＜役を引き取る→資金を負担する、賄う＞だろうか。分かり難い。　*「耳とどまる」は＜耳に付く＝気になる＞で、「あまりおどろおどろしきことと」と前振りがあるので、変な話と面白がる、みたいな言い方に聞こえるが、少将の上昇志向を少なからず刺激する言葉ではあったのだろう。

「さて、かの北の方には、かくとものしつや(ところで、奥方にはこうだと言割って来たのか)。心ざしことに思ひ始めたまへらむに(いよいよ姉姫の結婚準備に取り掛かり始めなさったようなのに)、ひき違へたらむ(話を変えるようなのは)、ひがひがしくねぢけたるやうにとりなす人もあらむ(私のことを性根が悪く不誠実な者の様に言い立てる女房もいることだろう)。いさや(その辺の後始末は如何なんだ)」

と思したゆたひたるを(と少将が懸念なさると)、

「何か(何の問題もありません)。北の方も、かの姫君をば(奥方も妹姫を)、いとやむごとなきものに思ひかしづきたてまつりたまふなりけり(とても大事に思い高貴に御育て申しなさっているのです)。ただ中のこのかみにて(ただ姉姫は姉妹の中で長女で)、*年も大人びたまふを(年も大きくいらっしゃるのを)、心苦しきことに思ひて(懸念して)、そなたにとおもむけて申されけるなりけり(其方を先にと考えて申されていた姉姫との結婚なのです)」　*「年も大人びたまふを」は注に＜娘たちの中で最年長。二十歳ほど。＞とある。私見では 21 歳。

と聞こゆ(と仲人は申します)。

「月ごろは(この数ヶ月)、またなく世の常ならずかしづくと言ひつるものの(その姉姫をただ一人格別に大事にすると言っていたものの)、うちつけにかく言ふもいかならむと思へども(急に妹姫を欲しいと言うのも如何なものかとは思うが)、なほ、一わたりはつらしと思はれ(やはり奥方からは一度は厭に思われ)、人にはすこし誹らるとも(人からは少し非難されようとも)、長らへて頼もしき事をこそ(長い目で見て安泰を図る事が大事だ)」と(と少将は)、いとまたくかしこき君にて(実にまた利口な貴公子なので)、思ひ取りてければ(腹を決めたので)、*日をだにとり替へで(日取りさえ変えずに)、契りし暮れにぞ(姉姫に通い始めると取り決めた日の夕方に)、おはし始めける(妹姫に通い始めなさったのです)。　*「日をだにとり替へで」は＜姉姫のところに通い始める日取りさえ替えずに＞ということらしく、であれば、仲人が守に説明した「この月のほどにと契りきこえさせたまふことはべる」(五段)の「この月」は＜今の八月＞だったのかもしれない。

［第八段　浮舟の縁談、破綻す］

　北の方は、*人知れずいそぎ立ちて（奥方は夫に相談もせず姉姫の結婚準備を進めて）、人びとの装束せさせ（女房たちを身繕いさせて）、しつらひなどよしよししうしたまふ（部屋の調度など季節感のあるように配置なさいます）。御方をも（姉姫自身にも）、頭洗はせ、取りつくろひて見るに（髪を洗わせて着飾らせてみると）、少将などいふほどの人に見せむも（左近少将などという身分の人に娶らせるのも）、惜しくあたらしきさまを（惜しまれるもったいない姿を）、　*「人」は夫の守だろう。

　「あはれや（ああ何ということか）。親に知られたてまつりて生ひ立ちたまはましかば（父親に認知申されて育ちなさったなら）、おはせずなりにたれども（八宮がお亡くなりになったとは言え、宮家筋なのだから）、大将殿ののたまふらむさまに（源右大将殿が申し込み下さった結婚を）、おほけなくとも（正妻が適わずとも）、などかは思ひ立たざらまし（どうしてお受け申さない事があろうか）。されど、うちうちにこそかく思へ（されど内情をいくら言った所で）、他の音聞きは（世間での通りは）、守の子とも思ひ分かず（守の子と区別無く受領家筋と見做されて）、また、実を尋ね知らむ人も（また実情を知る人も）、なかなか落としめ思ひぬべきこそ悲しけれ（却って妾腹子と見下すのが情けない）」

　など、思ひ続く（などと思い続けます）。

　「いかがはせむ（どうしたものか）。盛り過ぎたまはむもあいなし（みすみす女盛りが過ぎなさるのも惜しい）。卑しからず（家柄も良く）、めやすきほどの人の（無難な人柄の少将が）、かくねむごろにのたまふめるを（こう熱心に仰っているのなら）」

　など、心一つに思ひ定むるも（などと独断で結婚を決めるのも）、*媒のかく言よくいみじきに（仲立ちの斯くも少将や守を翻弄したような言葉巧みさに）、女はましてすかされたるにやあらむ（女である夫人はまして容易く言い包められたのかも知れません）。明日明後日と思へば（少将の三日通いが始まれば婚儀が整うのも、明日明後日と思えば）、心あわたたしくいそがしきに（夫人は心落ち着かず気忙しく）、こなたにも心のどかに居られたらず（姫の部屋にも呑気に座していられず）、*そそめきありくに（そわそわと客間近くを立ち歩いていると）、守外より入り来て（かみとよりいりきて、夫の守が御簾内へ入って来て）、ながながと、とどこほるところもなく言ひ続けて（長々と滞ること無く話し続けて）、　*「媒」は「なかだち」と読みがある。が、今まで本文には、この仲人を「なかだち」と称する記事は無く、言い換えの現代語分ではさすがに伏せたままでは不都合なので補語して来たが、此処までこの「なかだち」という呼称をせずに、この仲人を活躍させた古文の言い回しに、それでも意味は通じたのかと妙に感心する。が、しかし、それは私のような読者側の努力を相当要しているようにも思う。が、作者とその仲間内では、是が普通の言い回しで、私など全くの門外漢でしかないのだから、私は勝手に努力しているだけではある。　*「そそめきありく」は何処を歩くのか。そも、この受領家の造りや間取りが分からない。「こなた」が＜姫の部屋＞だとすれば、夫人は其処を出て別の部屋を見回ったのだろう。で、見回るとすれば、客人を迎えるのだから客間だろうと決め付ける。

「我を思ひ隔てて(私を除け者にして)、吾子の御懸想人を(あこのおおんけさうびとを、我が娘の許婚者を)奪はむとしたまひける(横取りしようとなさるのは)、おほけなく心幼きこと(大それた浅慮だ)。*めでたからむ御娘をば(御立派な血筋そうなあなたの娘を)、*要ぜさせたまふ君達あらじ(頼りなさる貴公子はいないだろう)。卑しく*異やうならむなにがしらが女子をぞ(身分が低く田舎臭い私の娘を)、*いやしうも尋ねのたまふめれ(選りに拠って求めなさるらしい)。かしこく思ひ企てられけれど(あなたは周到に用意したようでも)、もはら本意なしとて(少将殿は姉姫では意に沿わないと)、他ざまへ思ひなりたまふべかなれば(他家との縁談をお考えになったようなので)、同じくはと思ひてなむ(どうせ姉姫との縁が無いならと考えて)、さらば*御心(それでは少将殿の御望み通りにわが娘を)、と許し申しつる(と婚儀を許し申した)」　*「めでたからむみむすめをば」は注に＜浮舟をさす。皮肉な物言い。＞とある。　*「ようず」は＜必要とする→求める＞で、皮肉っぽく言えば＜頼りにする＞だろうか。ただ、「用無し」は＜役立たず＞だから、王家血筋をひけらかす夫人に対する強烈な嫌味は込められているのだろう。日頃のうっ積は貯まっていたのかも知れない。しかし、守は夫人の雅を敬ってもいたのであり、複雑な地方官心理だ。　*「異やう(ことやう)」は＜異様＞だが、此処では＜田舎臭い＞ということだろう。　*「いやしうも」は注に＜漢文訓読語「苟も」の音便形。男性の物言い。＞とある。「いやしくも」は現在でも稀に使う語だが、私には良く分からない語だ。で、私としては、「弥頻く(いやしく、いよいよ頻繁になる)」という語に縁付けて、別の事情があるにも関わらず＜敢えてそうする＞みたいな意味に取りたい。　*「御心(みこころ)」の「御」は少将への敬称だから、「御心」は＜少将の望みのままに＞。

など、あやしく*奥なく(など変に無表情に)、人の思はむところも知らぬ人にて(人の気持も考えない人のように)、言ひ散らしゐたり(言い放っていました)。　*「奥なし(あうなし)」は＜心の奥を見せない＝無表情＞ということ、かと思う。この守は、実は気配りのある、だから抜け目無い人で、成功者なのだろう。だから、この妻への言い種が思い遣りに欠けたものだと百も承知で、でも言わずには済まないので言ったのであり、目を瞑る代わりに仮面を付けたわけだ。「知らぬ人にて」の「にて」も意図した演出態度だ。

北の方、あきれて物も言はれで(奥方は驚き呆れて何も言えず)、とばかり思ふに(しばらく事態を考えると)、心憂さをかき連ね(無念さが込み上げて)、涙も落ちぬばかり思ひ続けられて(涙が落ちるほど悔しく思い続けられて)、やをら立ちぬ(力無く静かに部屋を去りました)。